

朝日工業アグリレポート

vol. 3

- ・病気に強いだけじゃない！耐病性に+αミニトマト「AMS-200」根張りを促進する「フミカルアップ」
- ・神川農場初夏フィールドデー開催
- ・土壤・肥料の歩みと私
- ・地域レポート

病気に強いだけじゃない！耐病性に+αミニトマト「AMS-200」



AMS-200

○黄化葉巻病耐病性について

黄化葉巻病はウイルスによって感染する病気でシルバーリーフコナジラミによって伝搬されます。感染すると葉の縁から黄化がはじまり葉柄の内側へと葉が巻き込みます。病気が進行すると全体が黄化して着果しなくなります。

黄化葉巻病耐病性品種は感受性品種よりもこれらウイルスに対する抵抗性は高くなります。しかし、高温や防除などの対策が不十分であると発病する恐れがあるので夏場の管理には十分対策が必要です。



黄化葉巻病に罹病したミニトマト株

根張りを促進する「フミカルアップ」

○フミカルアップとは

近年、堆肥等有機物の有効性についてはますます重要となってきています。有機物が多く含まれる土壌は軟らかく肥料養分を抱え込む力が強く根張りがよい傾向にあります。

当社が新たに販売を開始したフミカルアップは堆肥の主成分である腐植酸、良質な有機原料、水に溶けやすい硫酸カルシウムを混合したもので。期待される効果は、①根張りの促進、②保肥力の向上、③トマト等のカルシウム欠乏対策が期待できます。また、ペレット状のため機械施肥にも対応しており、散布作業の省力化を図ることができます。



施用効果試験



神川農場初夏フィールドデー開催

明日の農業を生み出す神川農場の初夏—



今年も賑わいを見せる神川農場

5度目の初夏を迎えた朝日工業神川農場で今年もフィールドデーが開催されました（6/6～8）。神川農場が開設されてから数多くの品種が生み出されました。フィールドデーに訪れた方々の意見・要望がキッカケとなって生まれた品種もあります。

今回は、ミニトマトの「AMS-200」・「AS-356」等の販売前の有望品種から昨年より本格販売を行っているカボチャの「プリメラ」シリーズや大玉トマトの「有彩」シリーズ等の新品種・定番品種を紹介しました。

圃場では当社社員が各品種の説明に加えて栽培管理等技術的な情報や产地情報等の意見交換をお客様と活発に行っていました。

当社では肥料事業も展開しており、当社肥料を施用した圃場を見て土づくりの相談・意見交換をされる場面もありました。

昨今では原料の高騰により農業資材価格も上昇傾向であるので適正な施肥管理、栽培管理ができるように今後も商品開発・情報提供に努めてまいります。



笑顔でPRする当社社員

〒367-0232

埼玉県児玉郡神川町大字新里字東北原 863-2

(朝日工業㈱関東工場から車で約 10 分)

●お車でお越しの場合

関越自動車道 本庄児玉インターチェンジより車で約 20 分

マップコード 20133425*3

●電車でお越しの場合

上越・長野新幹線 本庄早稲田駅下車 タクシーで約 25 分



土壤・肥料の歩みと私



筆者経歴

- ・JICA 事業中国山西省アルカリ土壤改良現地実証調査土壤肥料専門家派遣
- ・埼玉県農林総合研究センター 室長
- ・公立大学法人秋田県立大学 教授
- ・現在、東京農業大学 客員教授
- 一般財団法人日本土壤協会 常務理事
- 朝日工業株式会社 技術顧問

日高 伸先生

— 土の色 —

はじめまして、昨年 4 月に赴任しました日高と申します。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。朝日工業では毎月、土壤の勉強会が開催され、講師として教壇に立っています。本紙面をお借りして内容の一端を順次紹介させていただきます。

地球の表面は土壤に覆われていますが、平均 18 cm に満たない薄い層です。その土壤は数万年ととても長い時間をかけてつくられました。今、私達は土壤から数々の恵みを享受しています。

土壤は地球上の全生命を育み、緑の地球、生命溢れる豊かな生態系の基盤であることは、広く知られるようになりました。高校では新課程の生物Ⅱ や副読本等で自然生態系と土壤・植物の機能について学習します。また、大学では我々の時代とは大きく異なり、さまざまなカリキュラムを通じて土壤学の内容を幅広く履修する機会が増えています。

今世紀に入り国際的に土壤が注目されるようになったのはなぜでしょうか。私たちが知る土壤の多くは 19 世紀までは、深い原生林と原野に覆われて、一面に拓けた農地・土壤を観ることはできませんでした。それが、20 世紀半ば以降、人間が手に入れた機械力によって原野を開墾して農地化と都市化が急激に進みました。今では新たに開発する土地はこの地球上にはありません。それどころか土壤の侵食・地力の衰退が加速し、農耕地の土壤生産力に関しては世界の穀物反収は 20 世紀後半にすでに頭打ちになっていると言われています。肥沃な表層土壤が失われる危機に直面しています。

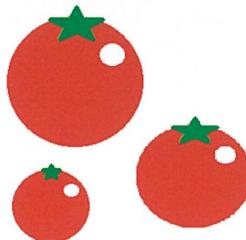
農業生産に深く係わる私たちは土壤と身近に接しています。業務が多忙な皆さんが時間を割いて土壤を勉強しようとする心がけに改めて敬意を表する次第です。この機会に、土壤の恵みを今一度見つめなおし深く理解することで、土づくりの意義、土壤を守る運動への理解が進むことを期待します。

私が土壤を意識したきっかけは中学時代、乗り合わせた日豊線に對面して座っている若いカップルの何気ない会話でした。窓の外を指さして「ねー見て、土が黒い」と驚いていたのです。この時の体験がその後も忘れられずに、大学で研究室を選択する動機になりました。今思えば、当時の新婚旅行のメッカ宮崎での観光途中だったのでしょう。南九州の火山灰土壤（表層多腐植黒ボク土）で日々を過ごした私は、土は黒いものだと思っていました。おそらく新婚さんは幼いころ関西の黄色土か東海地方の赤色土の野山で遊んだのでしょう。土壤は地域（緯度）、気象、地形、母材、植生（有機物）など、生成過程によって性質が大きく異なりますが、色は視覚として記憶に残るのでしょう。

地域レポート

雄大な有珠山に育まれた大地

そくべつちょう —壮瞥町のミニトマトを訪ねて—



○壮瞥町の土壤環境について

今回は、当社ミニトマト新品種「AMS-200」を栽培中の壮瞥町の東山さんの圃場を訪問させていただきました。壮瞥町は人口約2,600人、町内に有珠山を有しており洞爺湖とも隣接している町です。町内は有珠山の噴火による火山灰や礫に覆われた水捌けの良い土壌に恵まれています。

○東山さんのミニトマト栽培

東山さんの圃場では千果を中心に40aを栽培しており、AMS-200は現在15aで栽培しています。本期は、7月中旬頃に例年にはどの高温となり花ぶるい等の症状がみられましたが下旬からは気温が落ち着いてきたので収穫に期待が持たれます。

東山さんのミニトマトの栽培方針は栽培初期に水・肥料を多めに与えて樹を強く育て前半より後半の収量が期待できる栽培を目指しています。収穫が最盛期の頃には1日に約600kg(200ケース)を札幌・室蘭等へ出荷しています。

○AMS-200の感想

東山さんがAMS-200を栽培して感じた良さを3点あげていただきました。

1つ目は「裂果が少ない」という点。従来品種よりも裂果が少ないので無駄なく出荷ができます。

2つ目は「節間が短く小葉」という点。そのため作業がしやすく、また、樹全体の草姿のバランスがよく小葉であることもあり果実にしっかりと日光が当たります。



3つ目は「低段から果実の食味がよい」という点。初期に水・肥料を多めに与えているためどうしても初期低段の食味はやや味が薄くなりがちですが取材当日いただいた果実の味はとても好感を持ちました。。

○今後の希望

東山さんに今後当社のミニトマトにさらに期待する点を伺ったところ「AMS-200の良さを兼ねて収量性の高い品種が欲しい」とのことでした。今後の品種開発に活かし収量向上のための栽培技術をご提案していきます。



ミニトマト生産者 東山浩二さん

